

グローバル人材育成に向けた TOEIC[®] 指導 — 札幌大学外国語学部英語学科の教育実践例 —

對馬 康博

1. はじめに

本論では、札幌大学外国語学部英語学科の開設科目を教育事例として取り上げ、グローバル人材育成に向けた TOEIC[®] 指導について論じることを主たる目的とする。本稿の構成は以下の通りである。第2節では TOEIC[®] の概要を述べる。第3節では札幌大学外国語学部英語学科開設科目の「TOEIC A」という授業の概略と授業展開及び使用教材を紹介する。さらに、授業展開の効果を測定するために、TOEIC[®] 型の模試を用いた効果測定を報告・分析する。第4節では、グローバル活躍人材の育成に向けて、札幌というローカル地域との共創の観点から一般的展望を述べる。第5節は結語である。

2. TOEIC[®] の概要

TOEIC[®] (以下、TOEIC) とは米国で様々なテストプログラムの開発を手がける機関である Educational Testing Service (以下、ETS) が作成し運営する Test of English for International Communication の略称である。日本国内では「一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会 (The Institute for International Business Communication) (以下、IIBC)」が運営に当たり、2015年5月現在、これまでに200回を超える公開テストが実施されている。IIBCによると世界では、現在150カ国で実施され、年間約700万人が受験し、日本では年間240万人が受験していると報告されている。¹ ETS (翻訳: IIBC) が発行する『TOEIC[®] テスト World Wide Report 2013』の6頁の国別平均スコアによると、「アジア圏の近隣諸国の内、中国がTOTAL SCORE 716点、香港が644点、韓国が632点、台湾が569点、次いで日本が512点」である旨が報告されており、日本が一番低い。要因は様々であろうが、いわゆる「TOEIC熱」が近隣諸国で持て囃されていることは確かである。また、IIBCが発行する『TOEIC[®] プログラム DATA & ANALYSIS 2013 (以下、DATA & ANALYSIS 2013)』によると、日本における TOEIC データとして、「大学生の平均 TOTAL SCORE が440点、内、大学1年生が423点、大学2年生が437点、大学3年生が475点、大学4年生が506点」(同書7頁)である旨が報告されている。

² また、本稿の分析と大きく関わるものとして、『DATA & ANALYSIS 2013』によると、

大学生の中でも英語系の学生データとして、「語学・文学系（英語専攻）の平均 TOTAL SCORE が 504 点，内，大学 1 年生が 456 点，大学 2 年生が 499 点，大学 3 年生が 551 点，大学 4 年生が 585 点」（同書 8 頁）である旨報告されており，非英語専攻の学生よりも高いことは自明である。³

次に，TOEIC の種類について述べる。2015 年 5 月現在，TOEIC には「TOEIC[®] テスト」「TOEIC Bridge[®]」「TOEIC[®] S&W」の 3 種類がある。⁴ 『DATA & ANALYSIS 2013』によると，「TOEIC[®] テスト」は「身近なシーンからビジネスまで幅広い場面での英語コミュニケーションの能力を測定」（同書 2 頁）と定義され，Listening Section 45 分で 100 問と Reading Section 75 分で 100 問から構成され，スコアは 5 点刻みで TOTAL 最低 10 点から最高 990 点で採点される。次に，「TOEIC Bridge[®]」については『DATA & ANALYSIS 2013』によると，「日常的なシーンにおける基礎的な英語コミュニケーション能力を測定」（同書 2 頁）とされ，Listening Section 25 分で 50 問，Reading Section 35 分で 50 問から成り，スコアは 2 点刻みで TOTAL 最低 20 点から最高 180 点で採点される。最後に，「TOEIC[®] S&W」に関して，『DATA & ANALYSIS 2013』によれば，「コミュニケーションをはかるために必要な英語による発信能力の測定」（同書 2 頁）とされ，Speaking Test 20 分で 11 問，Writing Test 60 分で 8 問から構成され，各テスト 10 点刻みで最低 0 点から最高 200 点で採点される。こちらは前者 2 者のペーパーベースによる試験ではなく，コンピューターを用いたものであることが特徴的である。本稿の以下では，最も歴史が古く受験者数も多い「TOEIC[®] テスト（以下，TOEIC テスト及び TOEIC と略記）」に焦点を置き，検討を進めて行く。

続いて，TOEIC テストの構成について触れたい。先に述べたように，概略，Listening 45 分で 100 問と Reading 75 分で 100 問から構成されているが，その内訳は，Listening Section が Part 1～4 まで，Reading Section が Part 5～7 までの全 7 Part から成る。以下，著者が分析した TOEIC テストの全体の概要を表に示す。

表 1 : TOEIC® テストの構成

PART	出題問題	問題数
Listening Section (45分) 合計 100 問		
1	Photographs 写真描写問題	10
2	Question-Response 応答問題	30
3	Short Conversations 会話問題	30
4	Short Talks 説明文問題	30
Reading Section (75分) 合計 100 問		
5	Incomplete Sentences 短文穴埋め問題	40
6	Text Completion 長文穴埋め問題	12
7	Reading Comprehension 読解問題	48

それぞれの Part について概略を示す。まず Listening Section からみよう。Part 1 は写真描写問題であり、印刷されている写真を見て、それについて述べられている適切な一文を放送される 4 つの選択肢の中から選ぶという問題である。次の Part 2 は応答問題であり、放送される質問に対して放送される適切な返答の一文を 3 択の中から選ぶ問題である。Part 3 は会話問題であり、放送される男女の会話を聞いて、放送されかつ印刷されている質問に対してその答えを 1 つ選ぶ 4 択の問題である。さらに Part 4 は説明文問題であり、放送される説明文を聞いて、放送されかつ印刷されている質問に対してその答えを 1 つ選ぶ 4 択の問題である。

次に Reading Section である。Part 5 は短文穴埋め問題であり、いわゆる文法・語法・語彙に関する設問であり、空所に対して 4 択の中から適切なものを 1 つ選ばせる問題である。次の Part 6 は長文穴埋め問題であり、全パートと同様にいわゆる文法・語法・語彙に関する 4 択の問題である。前パートとの違いはディスコース・マーカー (Discourse Marker) (談話標識) を問う問題が出題されることである。さらに、Part 7 は読解問題

であり、簡単な広告文や請求書、e-mail 文章、掲示物など多岐に渡るジャンルのパッセージが出題される。出題形式としては、ひとつのパッセージに対して設問がついている「シングルパッセージ問題」とふたつのパッセージを読み比べて設問に解答する「ダブルパッセージ問題」の2種類が存在する。

以上、TOEIC テストの概要を述べたが、次節では、札幌大学外国語学部英語学科開設科目の「TOEIC A」という授業における TOEIC 指導の実践例を報告する。

3. TOEIC[®] 指導の実践例—札幌大学外国語学部英語学科開設科目の「TOEIC A」の教育実践例—

(1) 授業の概要

札幌大学外国語学部英語学科では、TOEIC のスコア・アップを目標として、2 年時以降（ただし、主に 2 年時履修推奨）を対象に、春学期に TOEIC 解法基礎研究・テスト演習というテーマを掲げた「TOEIC A」、秋学期に TOEIC 解法実戦研究・テスト演習というテーマで「TOEIC B」を開設している（平成 24 年度現在の入学生のカリキュラムで必修科目ではなく選択科目）。実践例として平成 25 年度札幌大学外国語学部英語学科開設科目「TOEIC A」を考察したい。TOEIC A は 1 年次の TOEIC 模試（以下の u-CAT）の結果から、目標スコアに応じて、Advanced Class と Basic Class の 2 クラスに分けて授業が展開された。担当講師はどちらも著者である。以下に平成 25 年度春学期開講（主に 4 月初旬～7 月下旬）の「TOEIC A」のシラバス（一部抜粋、成績評価の方法等は割愛）を示す。

表 2 : 平成 25 年度春学期開講の「TOEIC A」のシラバス

TOEIC A	
担当教員: 對馬 康博	
履修学年: 2~4年	単位数: 2単位
科目区分: 選択科目	
<p>■テーマ TOEIC解法基礎研究・テスト演習2013 —TOEIC頻出問題の全パターンと解法—</p> <p>■到達目標 TOEIC試験でスコア・アップするための基礎力の養成 [Advancedクラス目標スコア] Over 600! [Basicクラス目標スコア] Over 550!</p> <p>■授業概要 本授業ではTOEIC(Test of English for International Communication)の解法研究を行う。春学期開講のTOEIC Aでは基礎力を養成するために、すべてのセクションに目を向けて、とるべき解法戦略ととらざるべき方法を明確にし、常に分析的・実戦的に演習していく。</p> <p>■授業計画 第1講 オリエンテーション (TOEIC試験の概要と英語基礎力の確認) 第2講~第15講は以下のプロセスで演習する。 授業の前半20~30分程度 テスト演習 授業の後半60~70分程度 解説</p> <p>1. [リスニング演習] TOEIC PART 1-4に対応 聞くべきポイントを明確にし、頻出されている「全パターン」を提示する。</p> <p>2. [文法・語彙問題演習] TOEIC PART 5-6に対応 どの項目が頻出でどの項目がほとんど出題されることがないのかを明確に分析し、頻出されている「全パターン」を提示する。</p> <p>3. [読解問題演習] TOEIC PART 7に対応 TOEIC読解問題の中の「読解」と設問「解法」演習を行う。</p> <p>4. [語彙研究] TOEIC 全パートに対応 TOEICの頻出単語を提示し演習を行う。 ①基本動詞 ②ポキャビル(接頭語・接尾語・語幹) ③頻出単語</p> <p>各講、随時進度・テーマを変更することがありうる。</p> <p>■テキスト ①<i>Tactics for TOEIC® Listening and Reading Test Student's Book.</i> Oxford University Press. ISBN: 9780194529532 ②[Advancedクラス] <i>Grammar Collection Full Version.</i> [Basicクラス] <i>Grammar Collection Select Version.</i> ③對馬康博(著) <i>Strategies for TOEIC® Listening and Reading Test.</i></p>	

テーマは TOEIC の解法研究であるが、それぞれのクラスの目標スコアは、Advanced Class が 600 点以上、Basic Class が 550 点以上と全国の大学生平均よりもかなり高く設定している。もちろん、現実的に全員がこのスコアをクリアすることが最も望ましいが、英語を専攻する学生への動機付けの意味合いにおいても目標を高く設定した。

授業の構成（授業概要・授業計画）について触れる。第 1 講はオリエンテーションを行い、シラバスに基づき授業の説明及び TOEIC の概要について説明した。第 2 講～第 15 講では、授業の前半 20～30 分程度をテスト演習とし、授業の後半 60～70 分程度でその解説を行った。まず、授業の前半では、学生が予め予習してある単語の小テストを行った。出題は、テキスト③の對馬康博（著）*Strategies for TOEIC® Listening and Reading Test* 中の「TOEIC® 頻出単語・イディオム集 A to Z」から各回につき 50 個ずつである。その後、テキスト① *Tactics for TOEIC® Listening and Reading Test Student's Book* から TOEIC 形式の問題を選択し、テスト演習を実施した。この演習では、各講 Listening Section Part 1～4 の中から 1 つのパートを選択し、また、Reading Section Part 5～7 は全てのパートから典型的な問題を抽出し、実戦テストを実施した。他方、授業の後半では、当該実戦テストの出題問題を担当講師が解説を行い、TOEIC の頻出パターンや解法を示した。さらに、授業の最後 10 分程度では、語彙力を高めるため、語彙研究として、テキスト③の對馬康博（著）*Strategies for TOEIC® Listening and Reading Test* の中から、英語基本動詞の運用にスポットを当てた「基本動詞研究」と意味の類推に対応するための接頭辞・接尾辞・語幹の意味に焦点を当てた「Vocabulary Builder 研究」を行った。その他、5 回毎に 1 回（計 3 回）、単語小テストの代わりに、予め学生が予習してあるテキスト② *Grammar Collection* の文法・語法試験を行った。これは学生が TOEIC で最も弱点とするパートが Part 5 の文法・語法・語彙問題であることをこれまでの指導経験の蓄積から判明しており、このパートは高等学校での英文法項目が基本であると考え、学生には自力で予習してもらい、英文法項目の盲点を自力で解決してもらうため、この種の学習方法を取った。以上が授業内のカリキュラムである。

続いて、学生の予習及び復習である。本授業の予習に関しては、上掲の授業計画に従って、学生には指定された範囲の単語の整理と英文法項目の整理を要求した。また、復習としては、授業の中で実施されるテスト演習の解説を参考に、各自の TOEIC の弱点の整理と解法研究を要求した。さらに、各自の状況に応じて、TOEIC 形式の問題演習を行うことを促した。

次に、使用教材である。TOEIC を指導する際に公式教材の選択幅はかなり限られている。2015 年 5 月現在、日本国内の和書に限っては TOEIC テスト用の「公式」と冠のつく教材は、著者の調べた限りにおいて、『TOEIC® 新公式問題集』全 6 巻、『TOEIC® テ

スト公式プラクティス』としてリーディング編とリスニング編が各1巻、『TOEIC® テスト公式問題で学ぶボキャブラリー』が1巻のみで、いずれも解答付きである（TOEIC 熱が熱い隣国の韓国ではより多くの公式問題集が出版されている）。したがって、これ以外で書店に並ぶ TOEIC テスト用の教材は「非公式」ということになる。上掲の公式教材の他、授業・研修用にいわゆる洋書で TOEIC テストを主催する ETS より認可された問題を掲載する *Tactics for TOEIC® Listening and Reading Test Student's Book*（シラバスのテキスト①）が Oxford University Press より発売されている。こちらは Student's Book のみの購入が可能で、この場合、解答は付属されていない。本授業では、TOEIC テスト形式の問題の質が担保されているこちらの洋書を実戦テスト演習用のテキストとして採用した（加えて、上で述べた Part 5 対策用に自習用の *Grammar Collection*（シラバスのテキスト②）を採用している）。

さらに、上掲のテキストには簡単な解法が英語で紹介されているが、徹底した解法を示すために、自作テキスト *Strategies for TOEIC® Listening and Reading Test*（全167頁）（シラバスのテキスト③）を作成し、授業の中で使用した。このテキストの構成は、TOEIC® 解法研究編、読解理論編、Vocabulary 編の計3部からなる。特に、TOEIC® 解法研究編は各パートの頻出パターン、パート別毎の解法とパート内の問題タイプ別解法を示し、取るべき解法戦略ととらざるべき方法を明確に提示した。

（2）効果測定の方法

次に、この授業の効果測定用の試験として「u-CAT」を用いた。u-CAT とは韓国の TOEIC 運営を行う組織を傘下に持つ YBM/Sisa.com 社が開発した TOEIC 対策用の e-learning システムである。日本では朝日出版社が提携し、サービスを提供している。⁵ 1回の登録につき、模擬試験を4回分、ホームワーク（弱点克服演習）が3回分提供される。また、登録は3度まで更新が可能であり、全て更新すると4登録分（すなわち、16回分の模試と12回分のホームワーク）を異なる問題で取り組むことが可能な画期的なシステムである。1回の模試は100問で構成されているので、いわゆる「ハーフテスト」（上述の通り、実際の TOEIC テストは200問で構成）ということになる。模試の結果は3種類の診断評価書（ONLINE REPORT, TOPS REPORT, DIAGNOSTIC REPORT）が提供され、予測スコアとパート毎のスコアに加え、各パートの弱点とその攻略法が模試受験後に即座に示される。さらに、模試の結果を踏まえて、ホームワークとして受験者毎の弱点に焦点を合わせた弱点克服演習が、1回のホームワークにつき150問提供される。学習者はこれだけでも膨大な量の TOEIC 形式問題に触れることになるが、さらに普段の授業と

合わせると相当量の演習問題をこなすことになる。TOEIC A の履修者のほとんどは同時期に英語学科開設科目の英語技能科目 Reading III の授業内でこの模試を 4 回受験し、さらに課外でホームワークに取り組むことになっていた。u-CAT のシステムを活用することで、模試受験後、教員側も即座に現時点での学生の TOEIC 予想スコアを把握することが可能となり、授業効果の到達度をはかることができるようになった。

(3) 効果測定の結果報告

次に、u-CAT の模試の結果を活用して、授業の効果測定の結果を報告したい。上掲の通り、u-CAT は同時期開講の英語学科開設で 2 年時科目の Reading III で実施された。本来的には TOEIC 対策を行う TOEIC A の授業内で課すことが望ましいが、2 単位の授業で週 1 コマ展開、全 15 回という時間的制約、さらに履修者の人数の関係などの理由により、4 単位の授業で週 2 コマ展開で全 30 回の Reading III で実施された。もちろん、TOEIC A の全ての履修者が Reading III を履修しているわけではないが、TOEIC A は 2 年時履修推奨科目であり、かなりの履修者が重複して履修しているため、効果測定としてある程度の客観性が保てるものとして判断した。また、この期間の u-CAT は登録 1 回分とし、学生には模試 4 回とホームワーク 3 回を課した（ただし、u-CAT は 1 年時春学期・秋学期も実施しているため、2 年時の春学期は 3 ラウンド目ということになる）。

以下に、u-CAT の模試の結果を示したい。対象は平成 25 年度の英語学科 2 年生の TOEIC A 履修者のみとする。履修者の延べ人数は Advanced Class が 25 名、Basic Class が 18 名で、計 43 名である。データはこの中から過年度生（すなわち、3 年生、4 年生）と他学部からきている履修生の 5 名を除く。さらに、客観性を維持するため、2 年生でも 4 回の模試を完結していない者 6 名を除く。結果として、実質的にデータとして換算する者は Advanced Class が 20 名、Basic Class が 12 名で、計 32 名である。

測定算出手法として、授業開始月の平成 25 年 4 月実施の初回（1st）模試と最終月の 7 月実施の最終回（4th）模試の平均得点値をリスニングのスコア（Listening）、リーディングのスコア（Reading）、予想合計スコア（Expected Score）の 3 種類で算出し、さらに差（reminder）を出すことで伸び率を示した。なお、スコアの平均算出するにあたり、データは小数点を切り捨てる形で四捨五入している（ただし、実際の TOEIC のスコアは 5 点刻みであることに注意）。以下にその結果を表として示す。

表 3 : Advanced Class の模試結果

Advanced Class (20 students)			
	Listening	Reading	Expected Score
1st	276	238	514
4th	298	253	551
reminder	22	15	37

表 4 : Basic Class の模試結果

Basic Class (12 students)			
	Listening	Reading	Expected Score
1st	210	150	360
4th	234	184	418
reminder	24	34	58

表 5 : Advanced Class と Basic Class 全体の模試結果

Advanced Class + Basic Class (32 students)			
	Listening	Reading	Expected Score
1st	251	205	456
4th	274	227	501
reminder	23	22	45

まず、データの予想合計スコアから報告したい。Advanced Class の予想合計スコアは第1回が514点で第4回が551点であるから、その差としての伸び率は37点ということになる。他方、Basic Class の予想合計スコアは第1回が360点で第4回が418点であるから、その差としての伸び率は58点ということになる。したがって、Basic Classの方が伸び率が良いという結果となった。全クラス（Advanced Class + Basic Class）では、予想合計スコアは第1回が456点で第4回が501点であるから、その差としての伸び率は45点ということになる。

ここで得点率について、ひとつ述べておかなければならないことがある。TOEICの受験の初心者には良くありがちなことだが、数回の試験のスコアを比較した際に、かなりの開き（具体的には、50～100点以上程度）が生じることがある。この場合は、2つの要因

が考えられる。ひとつは問題にばらつきがあり、一方の試験が難しいと思われる可能性である。しかし、ETSは問題作成の際に、各回、“Equating”と呼ばれる難易度の調整を行っていることを唱っており、この可能性は直に排斥される（ただし、u-CATがどのような処理を行っているのかは未確認である）。もうひとつの可能性として、受験者の方が実際の英語力に加えて、いわゆる「直観」に頼った問題処理をしているため、当たった場合には実力以上の得点が得られ、当たらなかった場合には下がってしまうという可能性である。この可能性は多いにあり得る。これは本当の英語コミュニケーション力とは言えないため、こうした直観に頼らず、英語力に加えて、論理的かつ客観的な解法に基づく問題処理を行うよう指導する必要がある、TOEIC Aでもそれを徹底した。

次に、各セクションのスコアを報告する。Listening Sectionでは、Advanced Classのスコアは第1回が276点で第4回が298点であるから、その差としての伸び率は22点ということになる。一方、Basic Classでは、第1回が210点で第4回が234点であるから、その差としての伸び率は24点ということになる。全クラスでは第1回が251点で第4回が274点であるから、その差としての伸び率は23点ということになる。他方、Reading Sectionでは、Advanced Classのスコアは第1回が238点で第4回が253点であるから、その差としての伸び率は15点ということになる。Basic Classでは、第1回が150点で第4回が184点であるから、その差としての伸び率は34点ということになる。全クラスでは、第1回が205点で第4回が227点であるから、その差としての伸び率は22点ということになる。Listening SectionとReading Sectionを比較すると、どちらのクラスでも前者の方が高い得点となり、学生は前者の方が得意であるということになる。また、Advanced ClassでのListening SectionとReading Sectionの伸び率を比較すると、前者が22点であるのに対して後者は15点であり、前者の方が優位な結果となった。一方、Basic Classでは、それが反転し、前者が24点であるのに対して後者が34点となり、後者の方が高い結果となった。全クラスに目を向けると、前者が23点であるのに対して後者が22点であるからそれほど優位な差はみられなかった。

(4) 効果測定データの検証

以上の報告を踏まえて、データから見えてくることを検討したい。まず、総論として、今回の測定結果はどちらのクラスでも、2年時春学期期間中（4月上旬～7月下旬）にTOEICスコアの上昇（Advanced Classは予想合計スコア+37、Basic Classは+58）がみられると結果であった。英語学科ではTOEICに特化したTOEIC Aという授業だけではなく、Reading, Grammar, Listening, Writing, Oral Englishなど英語技能向上を目指

すクラスが幅広く開講されており、学生がこうしたクラスで習得した技能と TOEIC A での TOEIC 解法研究で演習した技術の相乗効果とみるほうが自然だと思われる。いずれにせよ、学生のスコアが向上しているということは、少なからず TOEIC A の授業効果もあると思われる。

次に、各論として、Advanced Class と Basic Class どちらも Reading よりも Listening の方が高い得点率となっている。これは中学校や高等学校からの昨今の発信型のコミュニケーション重視の英語教育の成果であることを物語っているように思われる。しかし、この副作用として Reading の点数が低くなっていることに留意されたい。これにはふたつの見方がある。ひとつは、元々、本学学生の Listening と Reading の潜在能力は同等程度で、Reading の教育は行われつつも、コミュニケーション重視の英語教育のおかげで Listening の方が突出したという見方、もうひとつは、コミュニケーション重視の教育が Listening に傾斜しすぎており、文法・語彙を中心とした精読に基づく読解としての Reading 教育が軽視されつつあるという見方である。著者の見立てとしては、後者の方である。客観的にこのデータだけから述べることができず、あくまで著者の印象にすぎないが、普段の授業の TOEIC 演習の採点結果をみていて、Reading の Part 7 Reading Comprehension (読解問題) は簡単な問題であればある程度の得点率となるが、Part 5 の Incomplete Sentences (短文穴埋め問題) と Part 6 の Text Completion (長文穴埋め問題) のいわゆる「文法・語法・語彙」問題は問題の難易度に関わらず圧倒的に低くなる傾向がある。かなり難易度が低く、中学校や高等学校の文法基礎事項を習得していれば確実に正答に致るはずの句 (phrase) や節 (clause) に関わる問題でも、正答率はそれほど高くない印象である。Reading Section 100 問中、Part 5 が 40 題、Part 6 が 12 題も占めるわけであるから、これらのパートの得点率が上がらないと、Reading Section 全体の得点率も相対的に上がらない。したがって、Part 5 と Part 6 の対策が Reading Section の鍵であることは間違いないと思われる。そのためには、高等学校や大学 1～2 年時で、文法 (Grammar) を軽視し、発信型の Speaking 及び Listening に過度な傾斜をする教育スタイルを取るのではなく、無味乾燥な暗記型の英文法は排除しても、発信型の英語教育を意識した実用性の高い英文法を導入し、バランスのとれた教育が要求されているように思われるわけである。

続いて、両クラスの伸び率を比較したい。Basic Class の伸び率 (+58 点) の方が Advanced Class のもの (+37 点) よりも高いという結果となった (ただし、各クラスの母数が違うので一概にこの点を強調することはできない) が、これにはいくつかの要因があると考えられる。ひとつは、各クラスの平均的な予測スコアに注目する必要がある

る。Advanced Class では、予測スコアの平均が第1回から500点を超えているのに対して、Basic Class ではそれが300点代後半から400点代前半にある。両クラスの平均的なスコアには150点前後の差が潜在的に生じていることになる。TOEIC A では、Advanced Class も Basic Class も解説方法に差はあるものの、基本的な演習問題は同じである（大きな違いは、自習教材の *Grammar Collection* のレベルだけである）。得点率の差は学生の努力の賜物とも言えようが、それに加えて、300点代後半から400点代前半の方が伸びやすい要因があるように思われる。一言で語り尽くせないが、各パートの基礎的な問題のミスをなくすこと、特に、Reading Section では Part 5 の文法・語法・語彙の問題の基礎問題をミス無く解けるようになることが重要な要因であると思われる。そのためには、基礎的な文法力と語彙力の習得に加え、適切な解法を身につけることが肝要であることは間違いない。また、Listening Section では短文レベルの聞き取り問題の Part 1 と Part 2 のミスをなくすことが重要である。Basic Class では、これらの点を徹底して指導したが、それが要因のひとつとなり、+58点という伸び率を得たように思われる。

では、Advanced Class の場合はどうか？もちろん、Basic Class と同様に基礎問題を徹底して取るよう指導したが、そもそも500点程度をコンスタントに得点できる場合には、既に基礎問題のミスが少ないように思われる。つまり、基礎問題の徹底に加えて、さらなる応用的な問題でも得点率を上げる必要がある。特に、Reading Section では Part 7 の Single Passage でも5問程度の設問が付く長文化した問題や Double Passage の問題の一部にも積極的に取り組む必要がある。これには精読力に加えて、論理的な判断を伴う速読と解法による問題処理力が必要となる。また、Listening Section では、Part 3 の対話の聞き取りや Part 4 の説明文の聞き取る力が必要となってくる。このように、Basic Class とは違うより高度な技能と処理能力の養成が500点以上の指導課題となってくる。Advanced Class ではこの点に重点を置き指導を行ったが、これが、伸び率+37点の要因のひとつとなったと推測する。

最後に、総括として、全国平均と TOEIC A での関連について、表6と共に考察したい。TOEIC A 両クラス (Advanced Class + Basic Class) の第4回の予想スコアは「501点」である。『DATA & ANALYSIS 2013』によると日本の大学生全般の平均は2年生では「437点」であり、語学・文学系（英語専攻）生の大学2年生の場合には「499点」となっていることは第2節で述べた通りである。したがって、本学の TOEIC A 履修者は全国の語学・文学系（英語専攻）生の平均値とほぼ同等である値を取得していることを述べておく（ただし、全国の大学生平均や語学・文学（英語専攻）の平均値は IP テストの結果であるのに対して、本学の TOEIC A 履修者の平均値は TOEIC (u-CAT) 模試に基づくことに注意されたい）。

表 6 : 全国大学生平均と本学 TOEIC A 履修者 (2 年生) の比較

	Expected Score
全国の大学 2 年生 IP テスト平均値	456 ※
全国の語学・文学系(英語専攻)の大学 2 年生の IP テスト平均値	499 ※
本学 TOEIC A 履修者(2 年生)の u-CAT 第 4 回の平均値	501 ☆

(※の値は『DATA & ANALYSIS 2013』7-8 頁より)

☆の値は表 5 の 4th Expected Score より)

(5) 本学の英語教育の今後の課題

以上のように、スコアレベルに応じて適切かつ明瞭な指導課題が存在することは明らかである。TOEIC A ではこのような指導課題に関して、ETS が認可した TOEIC 問題を含むテキストを用いて、カリキュラムを構成し、実戦的に指導することを試みた。履修者が全国の語学・文学系(英語専攻)の大学 2 年生の平均値とほぼ同値の値を取得しているということは、本学科のカリキュラムが質の高い英語力の涵養に貢献していると言えよう。

以上、英語力の一環として、本学の外国語学部英語学科の TOEIC 指導、特に TOEIC A という科目の教育実践例について、主に TOEIC 模試のデータから考察し、一定の成果をあげていることを検証してきた。しかし、教授する側と学習者としての学生が忘れてはならないことは、TOEIC のスコアを上げること自体が目的なのではないということである。むしろ、英語力全般としての技能 (skills) を向上させることが目的であり、それを計るための目安として TOEIC が存在しているということを認識することが肝要である。この点を誤ると、安易なテクニックに陥り、真の英語力が身に付かないことに繋がってしまいかねない。つまり、TOEIC のスコアは、英語技能を学んで身につけた英語力という結果であって、そのスコア自体を取ることが目的ではない。スコアは個人の技能を数値化したに過ぎない。TOEIC A の授業の中でもこの点は強調して指導した。ただし、TOEIC A と他の英語技能系開設科目 (Reading, Grammar, Listening, Writing, Oral English) との具体的な連携については行われておらず、この点が今後の課題である。

本学は平成 25 年度に改組され、「地域共創学群」となり、新たに「英語専攻」が誕生した。教育上肝要なことは、英語コミュニケーション力を生かして、学生がどのような自己実現を遂げることができるのかという点であり、同時に高等教育機関としての大学の英語教育の使命のひとつは、いかにして質の高いグローバル活躍人材を地域に排出できるかということであるように思われる。TOEIC A という科目は外国語学部英語学科から英語専

攻へと引き継がれており、本学は今後も質の高い英語力の養成に重点を置いたカリキュラムの提供の維持・向上が要求されている。

4. 地域共創とグローバル人材育成に向けて

前節で述べたように、本学は地域共創学群と改組され、地域により開かれた大学として貢献していく使命がある。本節では、本学がある「札幌」というローカル地域との共創の観点から、グローバル人材育成に向けた教育、特に TOEIC 指導のあり方について一般的展望を述べることにする。

札幌市では、昭和 47 年（1974 年）に冬季オリンピックが開催され、いち早くグローバル化の突入を迎えた。また、毎年 2 月には「さっぽろ雪まつり」という一大イベントが開催され、2015 年現在で 66 回開催されている。会場には「国際広場」が開設され（2015 年現在）、世界各地から参加者が集い、国際色豊かなイベントとなっている。また、札幌市は観光都市として確立しており、市内には海外からの客が集まる札幌ドーム、札幌コンサートホール Kitara、札幌コンベンションセンター（国際会議場）、イサム・ノグチ氏が設計したモエレ沼公園などがある。また、札幌はアクセスが良く、少し足を伸ばせば 1 時間程度で近郊に小樽や定山溪温泉などの観光地、また、美唄には、彫刻家・安田侃氏の野外彫刻公園「アルテピアッツァ美唄」などがあり、国内外からたくさんの人々が集まる背景がある。こうしたグローバル化しつつある札幌市では、平成 26 年 3 月に「札幌市国際戦略プラン」が策定され、さらなるグローバル化に対策を打とうとしている。札幌というブランド力を生かして、国際都市化し、観光のみならず、留学や投資、移住先として札幌が選択されることが望まれている。

こうしたさらなるグローバル化を目指している札幌市に本学は位置している。2010 年度現在の本学の調査では、本学の卒業生で北海道内の公立高等学校の英語教員である割合が全道で 12.8% を占めており、多くの教職人材を排出しているが、教職以外でも国際化の渦中にある札幌というローカル地域で活躍できるグローバル人材の育成が急務である。これには、国際語・世界語となりつつある「英語」の存在を抜きに語ることはできない。特に、高等教育機関としての大学は、学生に十分な英語の技能を習得させるだけでなく、世界の多文化を理解した異文化コミュニケーションをはかることができる人材を排出することが望まれる。こうしたグローバル人材がローカル地域としての札幌の中で、観光業、販売業、サービス業などに積極的に携わっていくことで地域に貢献していく時代が到来しつつあることは言うまでもない。

本稿では、英語コミュニケーションの能力をはかるための試験としての TOEIC テスト

に焦点を当てた TOEIC A という開設科目について、具体的なデータと共に検証を進めた。TOEIC に特化して言えば、TOEIC A の履修者（2 年生）のスコアは全国の語学・文学系（英語専攻）の大学 2 年生の平均値とほぼ同等のコミュニケーション能力を身につけており、本学は全国レベルやそれ以上の能力を持つ人材の育成指導法を確立していると言える。こうした高い英語コミュニケーション能力を持つグローバルな人材をより多く排出し、地域の中で活躍していただくことが本学の英語教育の使命のひとつにあると考える。

さらに、こうした正課過程で得られた方法論を札幌というローカル地域に還元し、生涯学習としての教育カリキュラムを提供し、地域と共に歩んで行くことが地域共創のひとつのあり方であるとする。地域共創を掲げる本学が、これまで以上に地域に開かれた大学として開放され、地域と共に発展していくことを願って止まない。

5. 結 語

小稿では、札幌大学外国語学部英語学科の開設科目を教育事例として取り上げ、グローバル人材育成に向けた TOEIC[®] 指導について論じた。まず、TOEIC[®] の概要について述べた。その後、札幌大学外国語学部英語学科開設科目の「TOEIC A」という授業の概略と授業展開、及び使用教材を紹介し、授業展開の効果を測定するために、TOEIC 型の模試を用いた効果測定を報告・分析した。さらに、グローバル活躍人材の育成に向けて、札幌というローカル地域との共創の観点から一般的展望を述べた。

<注>

TOEIC[®] is a registered trademark of Educational Testing Service (ETS). This paper is not endorsed or approved by ETS.

- 1 IIBC ホームページ <http://www.toeic.or.jp/toeic/about/what.html>（2015 年 5 月 11 日現在）
- 2 ただし、団体特別受験制度（IP：Institutional Program、以下 IP テスト）の結果による。
- 3 注 2 と同様。
- 4 厳密には、さらにそれぞれのテストに「団体特別受験制度（IP: Institutional Program、IP テストと略）」がある。
- 5 詳しくは、参考文献にある『e ラーニングによる新 TOEIC[®] TEST 徹底レッスン』を参照。

<参考文献>

Educational Testing Service（一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会（訳））.

（2014）『TOEIC[®] テスト World Wide Report 2013』

一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会.（2013）『TOEIC[®] プログラム

DATA & ANALYSIS 2013』

『eラーニングによる新 TOEIC[®] TEST 徹底レッスン』東京：朝日出版社。